

## 研究会

平成17年度に開催した研究会の題目と要旨は以下のとおりである。この研究会は、準備室時代から始まり、ほぼ月1回ペースで現在まで実施されている。発表者である学芸課職員は自由にテーマを選択できるが、当館における展覧会企画や館蔵品研究に関わる発表が少なくない。発表時間は約40分で、発表後は館長及び同僚たちとの質疑応答にはいる。20数年続いているこの研究会は、当館に根付いたアカデミックな伝統であり、ここから有益な示唆を得ることも多い。

5月

川村清雄作品における岩について

—《巨岩海浜図》の寓意を推察する—

発表者：堀切正人

静岡県立美術館所蔵の川村清雄《巨岩海浜図》は、描かれている巨岩や周囲の人々の主題がはっきりせず謎めいている。川村が日本近代洋画史において、寓意画を描くことのできる特異な画家であったことを考えると、この作品についても、何らかの寓意がこめられているのではないだろうか。近年、江戸東京博物館所蔵の膨大な川村家の資料が整理され、その中から《巨岩海浜図》に関連すると思われるスケッチなどが発見された。それらをもとに、川村作品における岩の描写のあとをたどり、川村が岩を吉祥と時の寓意として扱おうとしていたと推測した。川村が「君が代」の歌詞を大量に書き残していることや、《巨岩海浜図》が下田の風景であることなども勘案し、時代の流れの中で寓意表現の確立を試みた川村の労苦についても思いをはせた。

7月

田中孝《On The Table》《Breeze-2》について

発表者：村上 敬

当館では、平成2年度に、田中孝の作品《On The Table》《Breeze-2》を購入・収蔵した。1948年大津市生まれの田中は、京都市立芸術大学在学中からシルクスクリーンによるトリッキーな作品を発表、木村秀樹、安東奈々らとともに、70年代の版画ブームを支える作家の一人であった。

以上のような経歴から、田中の作品はトリックへの興味を中心に鑑賞されることが多い。しかし論者は、当館および和歌山県立近代美術館等の所蔵作の分析や文献資料の利用により、田中作品の表現の狙いは、ト

リックの冴えよりもむしろ「日常と隔絶した静謐な世界」を現出させることにあると主張した。また、その制作の実際においては、版の持つ「間接性」を有効に利用した表現と禁欲的な色彩処理が大きな役割を果たしていることも示唆した。

8月

田能村竹田「真景図」をめぐる

——旅と友～「自娛」の風景——

発表者：飯田 真

田能村竹田は、繊細な筆致により香気あふれる独自のスタイルを確立した江戸後期を代表する文人画家のひとりである。本発表では、竹田様式といわれる作画スタイルを具体的に確認すると同時に、竹田に「真景図」の作例が多いことに着目し、作例を紹介しながらその特質について考察した。旅の多かった竹田にとって、自分が体験した風景を題材にすることは自然であったが、そこには、友・理解者との語らい、酒、別離といった場面が念頭に置かれていることが多く、個人的感情と風景が結びついた表現となっている。それが「自娛」の絵画である竹田絵画の作画姿勢と大いに関係していることを指摘した。さらに、同時代の風景表現と比較した時、描かれる場所が多様になったことは軌を一にするが、その内容は文人画ならではの独特の様相をもっており、それが竹田絵画の特質となっていることにも言及した。

9月

鈴木慶則のだまし絵に見る「キッチュ」的特質

発表者：川谷承子

平成17年度に収蔵品に加わった、鈴木慶則の《非在のタブロー》シリーズ2点を含む、鈴木の一連のだまし絵を取り上げ、作風の変遷を分析すると共に、70年以降、次第に強まった「キッチュ」的性質についての考察を行った。鈴木のだまし絵は、1960年代末から1970年代初頭にかけて制作されたが、60年代に制作された作品は、グループ「幻触」の他の作家にも共通して見られる目騙し的な要素が強くみられるのに対し、70年以降の作品には、長い間、鈴木が深く交流を持った評論家石子順造の「キッチュ」という考えの影響が強く見られる。「民衆の生活の中で生成し、民衆の生活感覚、意識のフォルムともなった表現」としての「キッチュ」的性質に現代のリアリティを見出した石

子と、実作を通して石子の思想を表現した鈴木。発表では、《作品 - ゴッホによる》や《シーン》をはじめ70年代初頭の複数の作例をあげ石子の思想と鈴木の子の濃密な関連性を論じた。

10月

狩猟図とパレルゴン

発表者：小針由紀隆

16世紀後半から17世紀前半、フィレンツェとローマで制作された狩猟図は、王侯貴族や大市民の大掛かりな狩猟のありさまをよく伝えている。フィレンツェのメディチ家に仕えたフェデリーコ・ズッカロ、アントーニオ・テンペスタ、ジャック・カロらは、娯楽の一環としての狩猟を広大な風景の中に描き出している。

これらの作例を観察して気づくのは、美術家たちが遊興としての狩猟を表象しようとしたとき、画面の左前方によく似た狩猟者グループを組み込んでいたことである。変形されているとはいえ、一定の狩猟者グループが、どうして注目されたのだろうか？

この問題に取り組むにあたって、発表者は次の二点に留意した。第一に、狩猟者グループは狩猟本来の出来事である獲物との闘いとどのような関係にあったのか。第二に、狩猟は主題の枠組みと歴史の中で、どのような位置を与えられていたのか。拙考はいきおい、パレルゴンという美的概念と結びついていく。

11月

徳川慶喜の油彩画について

—静岡県立美術館所蔵作品に関する調査

発表者：泰井 良

静岡市清水区から徳川慶喜の油彩画が発見された。慶喜の油彩画は、これまで5点が現存確認されており、本作は、6点目にあたる新出作品である。本発表では、東京文化財研究所・山梨絵美子氏がなされた調査に基づき、作風や来歴の調査を行い、最終的に徳川慶喜作品であることを確認するに至った経緯について説明をした。精緻な筆法、おそらく実景ではなく何か模本を基に制作したと思われる画面構成など先行研究による慶喜の作風が、本作にも適応できる。本作は、江戸と明治をつなぐ黎明期の油彩画として、貴重な作品である。

12月

「見る物語」のための創意

—《ファウスト》から《ハムレット》へ

発表者：南 美幸

今年度の自主企画展「誘惑の光景—19世紀のロマン主義版画・ドラクロワ、ジョン・マーティンなど—」のカタログに掲載したエッセイのうち、ドラクロワに焦点を当てた発表。文学書の挿絵を描くという試みは、ドラクロワの生涯の中で複数回行われた。中でも、《ファウスト》と《ハムレット》の両連作を比較した場合、前者では背景を忠実に描きこんでいるが、後者では細部描写の省略化と登場人物のポーズなどによって、各場面を現代劇の一場面のような構成に仕立てている。こうした作風の変化は、作品の売れ行きや公衆の趣味に配慮した結果であることが推測されるが、同時代のボードレールなどに「文学的」と評されたにもかかわらず、作者の意図を一般大衆が理解することはなかった。

1月

「ジョン・マーティン作

『失樂園』に見られるドームについて」

発表者：新田建史

当館には19世紀イギリスの画家・版画家ジョン・マーティン（1789～1854年）のヒット作『失樂園』（1825～1827年刊行）が所蔵されている（P-128-940(1～24)）。本作品には、サタンによってアダムとイヴが誘惑されていく姿が描かれており、広大な風景表現を背景にしたその描写には、サタンが建設した万魔殿や、天国の宮殿などの建築物が含まれている。それらのうち第4図《万魔殿の出現》、第22図《天国—祝福の河》にはドーム状のモチーフが描かれており、類似するモチーフが第5図《地獄の会議を統括するサタン》にも見られる。本発表では、同じくマーティンの《想像し難い程の栄光に輝く都市の図》（1824年頃）をそれらの着想源として指摘した。この作品はEdwin ATHERSTONEの小説 *A Midsummer Day's Dream* の挿絵として描かれたもので、『失樂園』刊行直前の作品であり、これまで第7図《神の宮殿》、第22図《天国—祝福の河》とのみ関連付けて語られてきたものである。本発表ではさらに『失樂園』に見られる天国と地獄、天使とサタンらに対比的に描写する傾向の中で、上記のドームというモチーフも捉え得るものであり、この対比的な描写という手法が恐らくは同時代人にとっては把握し難いものであった可能性を指摘した。

---

2月

教育普及プログラムの開発と試行の結果から

—平成17年度に実施した普及事業の事例報告—

発表者：福元清志

平成17年度に開発した教育普及プログラムについて、その成果と今後の問題点について考察した研究発表。当館の普及事業の現状を確認した上で、「子ども鑑賞講座」、「ギャラリートーク・プラス」、「絵の具開放日」など、新たに加わったプログラムの目的や位置づけを説明し、試行した際の様子や参加者の反応を紹介した。これらの事業は、親子と一緒に楽しめる企画として、将来的に大きく発展する可能性を秘めている。また、ギャラリートーク・プラスは銅版画などの作品解説に制作実演をプラスしたものであるが、作品の魅力を理解するのに大変役立ったと、幅広い年齢層から好評であった。展示室での鑑賞と実技室での体験を融合させた取り組みとして、今後、様々な応用が考えられる。最後に、当館の教育普及活動にポツカリ開いた穴として、思春期から20歳代の若者に向けた企画の欠如を指摘し、調査研究を進める必要があることを確認して発表を締めくくった。